

実習教育と現場実践をつなぐ

— 卒業生の「あの頃」と「今」 —

岡田 隆志 (埼玉県立精神保健福祉センター)

小林 香織 (こころのクリニック高島平)

蓮沼 和音 (このはの家)

石川 綾子 (ふれあい東戸塚ホスピタル)

(以上4名はコミュニティ福祉学部一期生／コミュニティ福祉学科2002年卒業)

赤畑 淳 (福祉学科教員)

1. はじめに

実習とは何か。その定義は職種や立場により多数存在するだろう。臨床系のほとんどの国家資格で実習が必要であるように、精神保健福祉士^{注1}も例外ではなく、実践現場で一定時間以上の実習が必須となっている^{注2}。精神保健福祉援助実習は、実践をもとに理論化された専門的知識と技術について、実践現場において具体的かつ実際に理解し体得する機会(日本精神保健福祉士協会・日本精神保健福祉士養成校協会2013)と位置づけられ、学生たちは日常とは異なる実践現場に出向き、そこで様々な経験をする。事後学習では、実習体験の振り返りが行われるが、うまく言葉に出来ず悶々としてしまう学生が多い。そして、報告書等の作成を通し整理しつつ言語化できたとしても、実習に真剣に向き合った学生ほど、どこか浮かない表情を浮かべる。自分にとって実習とは何だったのか。実習で大切にしていたことは何か。この問いに本当の意味で答えられるまでには時間がかかるのだろう。また、実習について後々考える際も、個々の価値観や人生観そして経験も加味され、時間の経過と共にその答えはさらに多様化していくことは想像に難くない。

2014年1月、立教大学コミュニティ福祉学部福祉学科の実習報告会が開催された^{注3}。報告会の精神保健福祉領域の分科会に出席してくれた卒業生の声掛けにより、コミュニティ福祉学部1期生4名と実習のあり方について話をする機会を

持った。実習が現在の現場実践にどのようにつながっているのか。今も大切にしていることは何か。実践現場から学生時代の実習を振り返り、改めて考えたことを確認する作業を行った。

2. 実習体験から現場実践へ

(1) 実習教育と現場で働く今とのつながり～対等でありたいという想い～

岡田 隆志

「迷ったら原点」。職場の大先輩の口癖で、いつの間にか自分に身についた考えである。私は立教大学を卒業後、埼玉県に精神保健福祉士として入職し、デイケアや保健所、県庁等で勤務し、今年で13年目を迎える。そんなソーシャルワーカーとして働く私の原点は、大学での様々な学びにあったと今でも思っている。そこで今回、大学での学びが今の現場での実践にどのようにつながっているかを振り返ってみたい。

21世紀が直前に迫っていた2000年、大学3年生であった私は、埼玉県内にある精神科病院と授産施設にて、併せて4週間の実習をした。当時の私にとって、精神科病院に入ること、職員や患者さんとともに過ごすこと、あらゆることが初体験であった。非常に緊張した体験だけに、今でも印象深く記憶に残っている。実習を終えた後に提出した報告書の私のタイトルは「これだけは譲れないもの～対等でありたいという想い～」であった。

その内容は、コメディカル職員（ソーシャルワーカーや作業療法士など）が集まる院内勉強会での一場面を取り上げたものだった。その会では、ある患者さんへの援助のあり方について、職員から一目置かれるキャリアのある男性職員を中心に話し合いがもたれていた。だが、その男性職員の口ぶりは実習生である私にとって、これまでの経験に基づいてしか理解しようとしないうに聞こえ、違和感を抱いた。そこで私は手を挙げて「経験に頼ることなく、治療者の立場を取り払った正直な関係で接することが大事ではないか」と発言した。すると、その方に「その援助関係はあなた個人のやり方である」と指摘され、その会が終了した。翌日、その会に同席していた女性職員が私に「経験は前面に出す形あるものではなく、常に積み重ねるもので、絶えず変化しているものである」と指導してくださった。それから、私は専門職としての「経験を積むこと」の意味を考え、私の中で偏った考えをもっていたことに気づいた。経験とは「柔軟性のある豊かなかわりを育むための糧ともなるのではないか」と、考えに変化が生じたのである。ただ一方で、一人ひとりの患者さんとの正直で対等な関係を重んじる気持ちは揺るがずに持ち続けた。実習の体験によって、援助関係を築くためには相手のことと同じくらい自分自身を見つめることが大切なのだと実感できた。そして、経験知と一人ひとりの個別性との間で葛藤する中で、「対等であること」を問い

続けることが、以降の私のテーマとなったのである。

今の自分が当時の実習体験を振り返ると、ソーシャルワーカーとクライアントとの関係性について、「職業的な援助関係」と「パートナーシップ」といったやや両価的な考えがあると捉え、かかわりの構築には、しなやかな思考や態度を養うために、自分自身にも焦点化することのヒントを得ていたのだと考えられる。

精神保健福祉士として現場で働きだした私は、思いがけない多くの体験をした。精神障害で通所する利用者の力になりたいと意気込みすぎて、逆に背中を支えてもらったことの驚き、地域のために役に立てずに落ち込む自分を叱咤激励してくれたボランティアの方の優しさ。さらには精神科病院に長期間入院している方々の地域生活移行に関わる施策に直接携わりながらも、うまく運用できなかった悔しさなど、様々な場面や人との出会いの中から生まれるソーシャルワーク実践に日々悩みつつ向き合っている。そこで悩むというのは常に「精神障害がある方が人として地域住民と対等に暮らせるようになっているか。それを実現するためのかかわりになっているか」、そう自分に問いかけたときに生じるものであった。

つまり、実習教育において揺らいだり迷ったりしながら、ぼんやりながら大事にしていた考えは、今でも脈々と残っており、日々の実践における関わりの根幹を成していた。私にとっては、実習から13年間の時を経て経験が熟されて、ようやく一つひとつの体験が知となっている実感を得られるようになったのかもしれない。その中で大切にしてきた自分の基盤は、実習教育によって発芽した専門職としての価値であったように思う。本稿作成にあたり、実習での体験を振り返ったことによって、そのように思い直すに至った。

現在、私は日常業務のほかに、精神障害がある方や専門職、地域住民が一緒になった、地域でのスポーツ活動に力を注いでいる。この活動は、立場は違う人たちが目標を共有しながら、それぞれの役割を果たすといった協働を基調としている。その成立のために、ソーシャルワーカーは視野を広く持ち、精神障害がある方との活動であっても、手を取り合うパートナーとしての関係を築いていく態度が求められる。そして、目標の実現を目指す中で生じる喜びや軋轢を、言語や行動で相手と表現し合う対等性が根底になくてはならない。このような協働性の高い活動が生み出す力動によって、生活の場である地域に新たな変化が生み出されてくるのではないかとワクワクしながらチャレンジしているところである。

(2) 生き続ける体験 ～あの頃の私と今の私～

小林 香織

私は精神科病院のサテライトクリニックで働いている。現在の職場は大学時代に実習を行った場所である。私が今の職場にいるのは実習があったからであり、そもそも精神保健福祉士としての今の自分があるのは、その時の出会いと体験が

あったからだと痛感している。

通学しやすいことを理由に入学した私は、キラキラ輝いた目で福祉を語る同級生に対し、尊敬する念とともに高尚な学生らしい姿に引け目を感じる自分がいた。その過程の中で転機が訪れた。3年次の実習先を決める時期が来た。現場も実習の魅力も皆無だったため、せめて実習するなら全然想像できないところが良いと思った。そこで選んだのが「精神科医療機関」であり、私はその実習の中で様々な刺激を受けることとなった。初めに衝撃を受けたのは職種についての驚きだった。患者さんや家族、他職種の人と一丸となって問題を解決していく姿。人と人との関わり。専門職としての絶え間無い知識の向上、成長。また人間性すら問われる存在感。実習期間中、授業で熱く話されていた先生方の顔が幾度も浮かび、その言葉が頭の中で繰り返された。私は真剣に考えるようになった。

私は実習を通して当事者の方々、実習先の職員の方々、担当教員、ゼミの仲間から、とことん「かかわること」について考える機会をいただいた。当時の実習レポートには『真の関係を築くには自分の感情を伝えること、その感情に向き合うこと』『当事者の方から学ぶことの多さ。それを活かすのも自分次第』『正直に事実を伝えることと、正直に気持ちを伝えることの違い』『自分は当事者の方々に支えられていた』『私自身が彼らを必要としていた』等、実習経験から得て感じて、どうにか格好つけた言葉が散らばっている。

それらを読み返しなが、現在の現場でかかわっているAさんのことを思い出した。Aさんは私が大学を卒業して4年目、現職の同法人内の別のクリニックに勤務し、すぐに担当となった中年の統合失調症の男性である。ある日、訪問看護師さんから「Aさんの様子がおかしい」と連絡を受け、クリニックの車で自ら運転しAさんの家に向かった。訪問看護師さんと管理人さんに抱えられ出てきた姿は私の知っているAさんではなかった。その様子を見て、すぐさま主治医と入院連携室に連絡を入れた。私の震えた口調の説明で主治医も、連携室も状況を察知し早急に入院の受け入れ態勢が整った。Aさんの住んでいたマンションから病院まで車で十数分程度。Aさんの住んでいた部屋は私が一緒に探した部屋だった。訪問看護師さんとAさんが車の後部座席に座った。訪問看護師さんも私も、どうにか冷静さを装って声をかける。私は運転をしながらバックミラー越しのAさんの変わり果てた様子に涙ぐみ、動揺を隠せなかった。その後、Aさんは数ヶ月の入院加療によって本来のご自分を取り戻した。とっても人間らしい感情豊かなAさんに戻っていた。

たった2～3日薬を飲まなかったことで起こった出来事だった。私にとってAさんの、また精神障害を抱える患者さん全てにおいても、改めて病気・障害の重さを痛感した出来事だった。この10年近くで私は法人内で異動があり、Aさんと出会ったクリニックとは別のクリニックに勤務しているが、何かのご縁で現在も

Aさんの担当をさせていただいている。今でもAさんに関わらせていただくことで学ぶことは本当に多い。Aさんとは、たくさんケンカをした。一緒に行動をした。喜びも悲しみも分かち合った。Aさんの良い状態の時も悪い状態の時も関わることができたことで、様々なことを教えていただいた。今も進行形だ。

最近ふと感じることは「あなたのおかげで私がいる」ということ。我々の仕事は「相手」がいるからこそ成り立つ職種であることを忘れてはいけない。私は精神保健福祉士が「調整」「橋渡し」のみが機能であるならば将来的に必要とされなくなると思う。社会がどんどん整備されたら専門職でなくても、フローチャート式に資源につなげることが可能になると思う。しかし、どんなに社会が整備されても、障害の狭間で苦しんでいる方はいて、生きづらさを感じている方がいる。良い意味で辛さが見えにくくなった世の中だからこそ、当事者の方々と向き合い、個性を大事にして、そこから生まれる自身の感情と向き合うことが求められる。どんなに上手く資源を調整しても当事者の気持ちの揺れに寄り添うことができないければPSWの本来の存在価値が薄れてしまうのでないだろうか。

卒業後からありがたいことに精神保健の分野でずっと仕事をしてきた。経験して学ぶことばかりだ。たくさんゆらぎに遭遇した。時には腹を立て、時には泣いた。学生の頃から随分月日は経って、ある程度自分で動けるようになったが、今回、当時の実習レポートを振り返り、実習で培った私の「大切にしたいこと」は今も変わらないことを再確認した。実習はたった数週間だけど、ずっと生き続ける貴重な体験となるのだろう。

(3) 実習に行って悩んだ私に伝えたいこと～毎日一緒にいるということ～

蓮沼 和音

私は、大学3年次の実習先に児童養護施設を選んだ。今思うと、実習先の利用者さん、職員の方々には申し訳ないくらい、あまりに興味本位で、大きな理由もなく選んだ実習先だったと思う。そして、そのような気持ちで行った結果、私にとっては様々な衝突があり、多くの指摘を受け、自分自身の実習に向き合う気持ちが失われるような思いをした。それは、自分自身のことをとても肯定する事ができないような体験であった。様々な思いを感じながらも、その後、実習を振り返る機会を授業の中で頂くなどの経験を得たことで、実習について捉え直し、実習報告書を作成した。とはいえ、その報告書に私は卒業後再び向き合う事はできなかった。この度、再び向き合う機会を得て、卒業してから初めて報告書を読み返した。

私の実習報告書は、実習先で出会った女の子Hちゃんとの関わりを通して、ほめるという事や、伝えるという事、Hちゃんを含めた他者の存在の肯定といったことを考察している。Hちゃんがけんかをして他の子を泣かせたことに、「良く

ない事ではないか」と伝えた事で逆に怒らせてしまった出来事。それでもその後、Hちゃんとの様々な関わりがある中で、Hちゃんが自分にはほめてもらえないと感じている事、周りの職員に怒られる事を恐れている事について知った。私は、「Hちゃんにほめてもらえたと実感してもらいたい」と思った。しかし、ほめてもらえたという実感をえられる言葉、というものは私自身の中にはみつからなかった。相手に自身の存在を肯定してもらえたと感じられる言葉をかける事、真剣に向き合う事で、ほめ言葉は生まれるのだろうか、もやもや悩みながら締められていた。

今回、実習報告書を読んで思い返したのは、数ヶ月前の職場での出来事であった。大学卒業後、私は東京都内の精神障害者共同作業所（現：就労継続支援B型事業所）にてPSWとして働くようになった。活動としては製パン・製菓作業をメンバーさん（利用者）と一緒に行之、1日を過ごしている。作ったパンは行政機関などに配達販売を行っている。売り切れなかったパンは、翌日、メンバーさんやスタッフに安く販売している。

ある日の作業が終わった後の事であった。Bさんが前日に売れ残ったパンのうち、自分が購入しようとしたパンを探しはじめた。私も、一緒に探したりしていたが出てこなかった。そうしていると、Aさんが来て、「そのパンは私が食べてしまった」と言った。私は、Bさんに対して見つかってよかった、ということと、Aさんに対して売れ残ったパンは作業が終わってから皆で譲り合って分け合うのが施設のルールである事をお伝えした。その数日後、私はAさんに話があると言われた。Aさんからの話は、先日、自分が食べてしまったパンの件であった。「あの時皆の前で大きな声で私の事を怒ったけれど、そんな伝え方をするべきじゃないでしょ」と、私の伝え方についての指摘であった。私はAさんにいやな気持ちにさせたことを謝罪し、「今後はより一層伝え方に気をつけていきたい」とお伝えした。

この件は私にとって色々と考えさせられる出来事であった。その場所でのルールを伝えるのは、ご本人だけでなく周りのメンバーさんにも伝える意味合いもあり、私としてはあえて皆がいる場できちんと伝えるという形を選び、できるだけ丁寧に穏やかに伝えつつもりだった。しかし、その形を選んだ事でAさんは傷ついてしまった。いくら伝えるべき事だとしても、言葉選びや声の調子、場所やタイミングなど伝え方で様々な面に気をつけないと伝わらない、ということを改めて考えさせられた出来事であった。

卒業して12年間、伝え方については事あるごとに悩み続けていた。Aさんとの関わりの中で伝え方について考えさせられた矢先に、実習報告書を読み返し、同じように利用者さんの間に入ってHちゃんに嫌な思いをさせ、どのように伝えていったら良いのかと伝え方に悩んでいた自分は、今もあまり成長がないのでは、と多少落胆した。

しかし、報告書を読んだ上で今回の関わりを思い返すと、伝え方以外にも新たな視点が浮かび上がってくる。Aさんが私に直接話してくださったことである。メンバーさんによってはぐっと我慢される方もいらっしゃる。Aさんが私に向き合ってくださったのは、私に苦言を伝えたとしても関係が崩れないであろう、との思い、言い換えれば信頼があったと言えるのかもしれない。では、私とAさんの間での信頼、と言い得るものはどうやって出来上がったのか。思い返してみても、何か特別な出来事があった訳ではないし、特別な言葉を伝えたわけでもない。ただ毎日一緒にいたことしか思い浮かばない。積み重ねてきた時間がそうさせてくれたのではないか。相手の存在を肯定する気持ちは、何か特別な言葉で伝わる可能性もあるが、“一緒にいる”ということを一日一日積み重ねていくことで伝わっていく可能性があるのではないか。実習に行った頃の私は、長い時間をかけて変化していく関係性がある、ということについて知らなかったし、実感できなかったのである。

私が学生の頃に学んだ事は、今は答えが見えなくても常に悩む、考え続けるということであった。まさに今も学生の頃と同じようなことに悩み、学生の頃は考えなかったようなことに悩みながら毎日を過ごしている。それでも毎日を積み重ねていく事、そうしていくことで何かが変わっていく可能性があることを改めて考えさせられた。

(4) しぶとく謙虚に

石川 (旧姓:高智) 綾子

学生の私は良い実習をしたいという意気込みはあった。ただ、何をもって良いとするかは不鮮明であった。私は現在、神奈川県横浜市にある回復期リハビリテーション病棟と障害者施設等一般病棟を有する150床の民間病院でソーシャルワーカーとして働いている。今回は大学時代のゼミ仲間からの声かけもあり、自分の実習を思い返しつつ、今の自分が何を大切に思ってはたらいっているかを問うてみようと思う。

私は実習において児童領域分野を選択し、3年生の夏休みを利用して児童養護施設での実習を行った。私を含めた学部生3名が同時期に北の大地の北海道で宿泊しながらの4週間実習。今までの自分の生活スタイルとはまるで異なっており、且つそこで暮らす子どもたちの生育歴などを知ると衝撃を受けた。児童相談所にも連れて行ってもらえたが、多くの時間は生活をする施設で過ぎていった。10代半ばの女の子に外泊中にタバコを吸っていることをこっそり打ち明けられる、5歳の男の子に「手を洗わないといけないよ」と言うのと「お姉さん嫌い」と言われ何も言い返せないことなどいくつかの印象的な場面があった。そんな私の実習報告書の題名は「非日常」であった。そりゃそうだとつっこみたくなるが、実習先

という非日常の中で「実習生として」どう振る舞えば正しいのかに重きを置いていたように思う。

実習を終えた夏休み後にゼミの時間を用いて仲間実習の振り返りを重ねていくと、自分の実習に劣等感を抱くこともあった。「実習の間に何か見落としていることがなかったか」、「私も精神領域の実習に行けばよかったのだろうか」、もやもやとした重い霧のようなものに包まれた気持ちもあった。なぜそう思ったのか。私はもがいていなかったのだ。浅瀬でおぼれないよう、そつなく泳いでいたのだと気づかされた。

ただ、思い返せばその時のゼミで仲間の体験を知り、感じたことを聴き、自分だったらどうしたであろうと共に悩む作業ができたことは有意義であった。自分の実習ではないところに正直寂しい気持ちもあるが、あの頃の自分に言えることが二つある。一つは実習内容がどうなのかだけではなく、その内容を掘り下げ、それを基に自分自身を知り、振り返る作業も実習の一環であること。もう一つは他者の実習後の話を共に悩み共感することも実習の一部と捉えていいのではないかということだ。実際に働き始めた後もこれらの時間は自分を支えてくれる、とても贅沢な時間であったのだと身に沁みて実感している。

今、ソーシャルワーカーとして働いて13年目だが、自分の仕事が俯瞰的に見え、自分らしさを出せるようになったのは10年過ぎてからだった。現場で患者や家族に育ててもらっていると日々感じる。後悔や失敗も含めた全ての経験によって少しずつ肉付けされてきた。相手と心を寄せ合えたと感じたとき、仕事上での関係性だけではない人対人の関わりの奥行きを実感する。研修や勉強会に参加したことで視野が広がり、ソーシャルワーカー同士のやりとりや地域の他職種連携のネットワークに参加させてもらうことで、顔の見える関係性があることの強さを知った。それでも関係者から「病院は敷居が高い、相談しにくい」と言われることもある。その声に反発するのではなく、まずは謙虚に生の声を聴き、自覚することが大切だと思っている。そして、地域の声を院内に届けることもソーシャルワーカーだからこそできることだと思う。院内での業務やベッド調整に目が回りそうになったり、病院という組織のなかで身動きの取りにくさを感じることもあるが、そのなかで自分をどう生かしてソーシャルワークをするかがこの仕事の面白みの一つであるような気もする。

相談援助の場面では、いいことをしていると思うときほど疑ってかからねばと肝に銘じないと、自分が行っていることがいいことで正しいのだと思いやすい。且つ正しいと言い切る方が、ああでもないこうでもないと繰り返し、経過を積んでいくより楽で分かりやすい。一方、悩み続けることや疑問を持ち続けることはとてもエネルギーが必要である。だが、傍から見ても分かりにくい。そこをしぶとくやっていけば時間をかけて自分の核となり醸成されていくような気がする。

病院では結局どうなったのか結果や結論を求められることも多くもどかしさを感じることもあるが、私はしぶとく謙虚にやっていたと思っています。

最後になるが、ゼミの仲間がいなければ私はこの仕事を続けられてはいなかったであろう。しぶとく悩み疑問を持ち続けることも一人ではできない。卒業してから会える回数は少なくなったが、会えなくても「彼らならこんな時に何というか」と自分自身に問いかけることもある。それぞれの現場で頑張っている彼らの存在がこれまでどんなに自分を支えてくれたかを文章にしてみても改めて思い知らされることになったのである。

3. まとめ ～現場実践の核となるもの～

実習体験および現場実践は個性の高いものであるが、各々の文章からは核となる共通性も見えて取れる。ここでは、共通項をもとに三つのキーワードを軸に、いくつかの言葉を引用しながらまとめてみたい。

一つ目は「かかわり」である。対人援助、つまり「相手がいるからこそ成り立つ職種」であるソーシャルワーカーにとって、人とのかかわりについて多側面からじっくりと考える経験は何よりも重要である。個性を大切に、自他と向き合わねば、本当の意味で「当事者の気持ちの揺れに寄り添う」実践は不可能であろう。これらのかかわりこそがソーシャルワーカーの存在価値を示す核であると、実感していたのである。

二つ目は「時間」である。「今は答えが見えなくても常に悩む、考え続ける」ことを学生時代に学び、それが現場実践の中で「長い時間をかけて変化していく関係性」の構築に繋がっている。「悩み続けることや疑問を持ち続けることは、とてもエネルギーが必要」であることは認識しつつ、「そこをしぶとくやっていたら時間をかけて自分の核となり醸成されていく」と気付いたのである。このことは、考え続ける姿勢を学んだことにより、現場で出会う悩みや疑問が「時間」の経過とともに、自分の核となっていくことを示している。それは、尾崎が今後の課題であげていた「『ゆらぎ』体験から何かを学ぶためには時間も必要」（尾崎1999：322）ということを示しており、「時を経て経験が熟されて、ようやく一つひとつの体験が知となっている実感」という記述がそれを証明している。

三つ目は「場」である。それぞれが実習で体験したことを語る場があり、その時点での気持ちを表出できる場である。もちろんそこには他者の存在が必要であり、ともに考えることで個々の体験が深まると同時に、共有の経験として蓄積される。そのことは「内容を掘り下げ、それを基に自分自身を知り、振り返る作業も実習の一環であること」「他者の実習後の話を共に悩み共感することも実習の一部と捉えていい」「実際に働き始めた後もこれらの時間は自分を支えてくれる」という言葉が示している。さらに、「実習教育において揺らいだり迷ったりしな

がら、ぼんやりながら大事にしていた考えは、今でも脈々と残っており、日々の実践における関わりの根幹」となっていることから、ゼミなども含めたまなびが、現場実践での基盤とになっていることがうかがえる。そして、実習教育という狭い範囲にとどまらず、卒後のつながりを通して迷ったときの「原点」を再確認し、各々の実践を豊かなものにしていたのである。

4. おわりに

昨年度、学生たちと事前学習からの学びを振り返っていたとき、「実習って、土を耕し、種をまき、水をやって…そんなイメージがある」とある学生が口にした。その場にいた皆が賛同しつつ、「本当に芽が出るのかな」と他の学生が言い笑った場面を思い出す。いみじくも、今回「大切にしてきた自分の基盤は、実習教育によって発芽した専門職としての価値であった」と14年前に実習を行った卒業生たちが書いてくれたことと重なった。最後に卒業生の一人が実習報告書に記した一節を引用して終えたいと思う。

『(実習で利用者が) 話してくれた経験を、私は無駄にしないで生かしていくことで、単なる「利用」で終わってしまうことにはならないのだと考えるようになった。私にはその責任があるのだと思うようになった。』

実習を行ったものの責務として、原点を忘れず実習での経験を実践に活かしていくことが、さらなる種をまくことにつながるのかもしれない。

【注】

- (1) 精神保健福祉士とは、1997年に誕生した精神保健福祉領域のソーシャルワーカーの国家資格である。社会福祉学を学問的基盤として、精神障害およびメンタルヘルスの課題を抱える人たちの、生活問題や社会問題の解決のための援助、地域生活支援を行っている。
- (2) 2010年「精神保健福祉士法」改正により、養成課程の見直しが行われ、「実践力の高い精神保健福祉士の養成」のために、精神保健福祉援助実習の時間が210時間以上となった。
- (3) 立教大学の福祉実習は特徴として領域別実習を行っており、実習報告会では社会福祉士・精神保健福祉士ともに、それぞれの領域で分科会が開催されている。

【文献】

日本精神保健福祉士協会・日本精神保健福祉士養成校協会編（2013）『教員と実習指導者のための精神保健福祉援助実習・演習』中央法規出版。

尾崎新（1999）『「ゆらぐ」ことのできる力—ゆらぎと社会福祉実践』、誠信書房。

立教大学コミュニティ福祉学部実習委員会編『創る活きる2000年度社会福祉援助技術現場実習・精神保健福祉援助実習報告書』立教大学コミュニティ福祉学部。